

「ふるさととは遠きにありて思ふものなり」 卷二 仙台空襲

ゆとろ 満

一、仙台空襲

仙台がアメリカ軍B-29（以下B29）型爆撃機に空襲されたのは昭和二十年（一九四五）年七月十日午前零時三分のことであった。当夜は数少ない快晴の夜であった。というのも、この年の六月下旬は連日曇り、空襲後の七月十一日から下旬まで、曇りや雨が続いた。天気までアメリカ軍に味方した。いや、アメリカ軍は気象観測の上、この日を選んだと言うべきであろう。東彦^{はるひこ}一歳八ヶ月の夏であった。空襲警報発令は零時五分で、発令は空襲開始の二分後であった。この二分間の差は、大きい。生死が掛かっていた二分間であったからである。「突然の空襲警報に避難は間

に合わず、小規模な防空壕の中にいながら多くの人が焼死した」とある。もし、空襲以前に警報が発令されていたならば、これらの人々の内何人かはより安全な場所に避難し、命を永らえたかもしれないのである。同じようことは三月十日の東京大空襲でもあった。「空襲の約一時間前に警戒報が出されたが、すぐに解除、そして爆撃が始まった七分後に警報が鳴った」（ウイキペディア）のである。この空襲で死者約八万から十万人と言われている。そもそも空襲警報はなぜ遅れたのであろうか。B29の宮城県襲来はこの時が初めてではなかった。昭和十九年十一月二十九日、塩竈にB29一機が飛来し油脂焼夷弾約五百投下、そのために焼失家屋五七〇余戸、被災者三、二〇〇余

名生じたとある（『仙台空襲』三二六頁。以下同書からの引用は頁の記述）。宮城県下最初の空襲であった。しかも、この空襲は、岩手県の偵察の帰りに爆撃したものと考えられている。「いきがけの駄賃」という言葉があるが、いかにも事のついでにやらかしていった、としか思えないような所業である。死傷者も被災者もたまたまものではなかったろう。翌年の三月十日（東京空襲の日でもある）に蔵王連峰の不忘山にB29三機が墜落している。また、五月二十五日にはB29の偵察機が仙台上空に飛来し、空中写真撮影している。アメリカ軍はこの写真を元に空襲の立案をしている。「仙台は工業面での重要性はないが、住宅が密集し延焼を防ぐ広い道路や広場がほとんどないといった点から、焼夷爆撃攻撃に適した都市であり、爆撃による効果も期待できる」と。ほとんどモルモットの実験対象扱いである。しかも、「仙台よい町森の町、七月十日は灰の町」と印刷した紙ビラを空中から撒き、空襲の警告を出していたのである。更に、仙台空襲の五日前の七月五日、B29二機が飛来し、芦の口に爆弾三個を投下している。芦の口とは現在の仙台市太白区の南西部丘陵地帯のことである。

このように、B29の宮城県への飛来、爆撃は数度に及んでいた。しかも三月十日の東京大空襲や日本各地の空襲の情報も入っていただろう。これらの情報を勘案すれば仙台市の空襲は予見出来たはずだろう。実際に予見していたの

かもしれない。しかし、現実には空襲警報は遅れてしまっていた。

当時の仙台NHK放送部のアナウンサーであった神山孜氏は、「仙台空襲は軍情報部も知っていたに違いないと思う。私達の中の三、四人はアメリカの短波放送を傍受しており、日本向け宣伝放送は『七月九日、仙台におじやましますから疎開するように』とすすめていた。空襲の日の一週間位前、警報が出てB29一機が仙台上空をゆうゆうと飛んでいた。このとき爆撃目標の写真を撮影していることも私は知った。しかし短波放送聴取は厳に禁止され、「中略」その内容を口外しようものなら、憲兵が来て連行され、重罰にされるのである」（二六頁）。また、医師であった塚本栄七郎氏も「当日仙台が空襲を受けるといふ情報は、軍部と一部の人は知っていたらなかったので、もし一日早く市民に避難するように警告をしていたならば、これほど多数の尊い人命を失わず、多くの財産を焼失せずすんだらうと思う」と手記に書いている（八二頁）。

当時、空襲の警報は二段階になっていた。第一段階が警戒警報の発令である。住民は灯火管制の実施をしなければならなかった。第二段階が空襲警報の発令である。この場合は、住民は速やかに防空壕への避難をするように指示されていた。発令者は当該地域を担当する防衛司令官、師団長、要塞司令官などであった。宮城県の場合は「東北軍管

「区」が管轄していたようである。発令はNHK放送を通じて行われた。

当時の日本の本土防空においては、レーダーや聴音機の絶対的な不足にあった。また、各地に設けられた軍民双方の対空監視哨（目視にて敵機を監視する見張り台）と司令部間の通信設備の不備などの問題から監視機能は必ずしもうまく機能しなかった。

「遅れた空襲警報」について詳細を記した手記がある。当時、東北軍管区司令部参謀部に在籍していた佐藤多都夫氏の内部告発ともいべき貴重な手記である。少し長いが引用する。

「さて、防空作戦室の人達に直接聞いた結果、当夜の模様は次のようになる。その夜はB29が一機、午後九時頃、福島海岸部を北上し、牡鹿半島を経て三陸海岸を北上の後、南転して太平洋に脱した。これが初めての警戒警報である。そして解除になったが、この夜本土を襲うべき大編隊が、サイパンを発進していることはすでに情報として入っていた。当夜の当直参謀は、K情報担当参謀であった。鹿島灘を北上する大編隊の情報を見ながら、警戒警報を出さなかったのは、いつも、西転して、関東を襲うことが多いので、今夜もという気持ちがあったらしい。そのうちに、

・小名浜の監視哨から、との情報が入ったが、いぜん、今夜仙台空襲の判断が出ずに、福島、宮城地区警戒警報（空

えよう。これは構造的な問題で、当時の国民にはいかんともし難いことであった。

B29は、普通高度一万呎を飛行するという。しかし、日本の高射砲は千五百呎しか弾が届かなかった。これを踏まえて、爆撃の命中率を高めるためB29は高度三千呎辺りからの夜間焼夷弾攻撃に切り替えたと言われる。

仙台も高度約三千呎よりB29二、三機から五機くらいの編成で25波に分かれ、約二時間にわたって空襲された。焼夷弾は一万九百六十一発による絨毯爆撃と高性能爆弾八個により、仙台中心部は焦土と化した。このため仙台駅から西方約一・八^キ先の西公園が見えるようになったという。死者千六十四名（身元が分かった人で仙台市に籍を置き、届け出のあった人数）、身元不明三百三十五名、負傷者六百八十三名、被災者五万七千三百二十一名（仙台市戦災復興記念館発行案内書「戦災と復興」より）であった。こうして森の中に街があった文字通りの「森の町」（現在は「杜の都」）であった仙台は、一夜で全くの灰燼に帰したのである。ちなみに「白亜の校舎」と呼ばれていた東彦たちの母校の前で、広瀬川の清流を望む西公園にあった仙台中学校も焼失している。

この日、東彦の高校の同級生らも被災した。隔月毎有志のクラス会が「ひろ」という十人も入れば満席になる居酒屋

襲撃報ではない。作者）を発令した。だが、驚くべきことには、鮎川監視哨から敵大編隊旋回中という情報が入った。アワをくつたK参謀は宮城、福島地区に空襲警報を発令した。（中略）その時B29の大編隊は閉上上空に近づいていたのではなからうか。女子防空通信隊員がハンドルを回して、警報発令を伝達しているとき、爆撃進路に入った大編隊の先頭は北転して、大年寺山から北山を結ぶ線で、先頭機からは第一弾が投下され、肴町^{さかなまち}あたりを南北に火の帯にしていた。従って、その最中に、市役所のサイレンが空襲警報を、火にあぶられながら全市に伝えたというのが真相であった。（三一八頁）

危機意識の欠如、状況認識・判断力の甘さの極みといっても過言ではなからう。

さらに、当時における政府、就中軍部の国民の生命に対する価値観である。これは極めて軽んじたことは周知の事実であろう。「焼夷弾の火の粉は、はたきで叩き落せ」とか「上陸した敵に竹槍で迎え討て」などというまるで幼児的対応ともいべきことがまじめに語られていたのである。その発想は恐るべきほどの無知蒙昧、荒唐無稽とも言えた。

警報の遅れは、根底には、第一にハードウェアともいべき監視機器や通信設備の不備、第二にソフトウェアともいべき軍部の国民の生命や財産に対する軽視が要因と言

屋で開催されていた。三越仙台支店近くの東一市場という小さな路地にある。会の名前はこの居酒屋の店名を採って「ひろの会」と名付けられていた。五十過ぎのママが一人で切り盛りしている。客におもねることなどはないが、実直な話しぶりでいつ行っても新鮮な地元の素材を使って心のこもった手料理を出してくれる。東彦は遠方であることもあってせいぜい年に一、二回ほどしか参加していなかった。

東彦が両親の墓参りで帰省した日にちとこの「ひろの会」がちょうど重なった七月のことであった。東彦は帰省の楽しみが倍にも膨れ、勇んで会場の「ひろ」に向かった。いつもは地下鉄南北線勾当台公園駅で下車し、三越の裏手を目指して行っていた。ところが早めに実家を出たため、仙台駅に着いたときは開始時刻の一時前であった。久しぶりに名掛丁や一番町をぶらぶらしながら行こうと思い、下車した。アーケード街のこの通りは仙台市内で一番の繁華街である。金曜日の午後四時ごろであったが、大変な人混みで、人の波をかき分けながら通行しなければならぬほどの混雑ぶりであった。あちこち国内を旅行してシャッター通と言われる光景を目にして来た東彦には、この人混みの一割でもこれらの地方都市に流れていったならばどれほどその地は助かるのだろうか、ふとそんなことを思った。開始時刻の十分前ころに三越ビルの見える位置に着いた。

ところがそこから東彦は迷ってしまった。いつも夕闇迫る薄暗い時刻に、しかも、反対側の東二番丁通から会場に向かっていた。この日はいわば表通りともいえるべき一番丁通から、しかもまだ明るい時刻であったため以前の風景と違つて見え、方向感覚を失つてしまったのである。確かに会場のすぐ近くに来ていたのだが分からないのである。

「老いてしまった」と東彦は思わずつぶやいてしまった。仕方なく幹事の明坂に電話をした。すると五郎と離れていない店から姿を現したのである。東彦は追い打ちをかけたようにがつくりとしてしまった。しかし「待つてだつちや、遠いところからご苦労さんだつちやね」と懐かしい仙台弁で温かく迎えてくれた。東彦の目頭がじんわりとしてきた。「同級生つてありがたいな」と、東彦は心の中で呟いた。

この日の会費は酒代を含めて五千円であった。ママが用意してくれた日本酒は、青森県上北郡おいらせにある桃川製造の吟醸純米酒「杉玉」という銘柄であった。この杉玉というのは、軒下に吊るし新酒ができたという印なのだ。ちなみにこの日出された料理は、カツオの刺身、ホヤの酢の物、仙台長茄子の漬け物、やわらか牛タン、煮しめ（インゲン、筍、笹かまぼこ、ホタテ、サツマ揚げ）、枝豆であった。焼酎は赤霧島、ウイスキーはサントリーの「響」が用意されていた。「心尽くし」というのがびつた

りであった。

話題はどうしても高校時代や母校の活躍、特にこの時期は硬式野球部の甲子園出場の可能性などが中心になった。母校は一度甲子園に出場したが、その後はない。仙台育英、東北高校の強豪にはどうしても歯が立たないで来ているのだ。この年は有望なピッチャーがいるということで期待されたのだが、結局三回戦で敗退してしまった。

七月ということがあつてか、仙台空襲の話が出た。この日の参加者は八人であつたが、このうち二人が秋保という温泉場に疎開していた。そして他の二人が空襲に遭遇したというのである。中山と神坂である。

空襲当時、中山は東九番丁に住んでいた。東九番丁は仙台駅から南へ約一キロほどの距離にある。夜中に父親が大声で「空襲だ、起きろ」と家人を起こした。母親は急ぎ中山を起こすや防空頭巾を被せると、素早く背負い自宅敷地内にあつた小さな防空壕に避難したという。ところが、B29の爆音、ヒュルヒュルという焼夷弾の投下音と爆発音はすさまじかった。そして北西方向の空は紅蓮の炎で真っ赤に染まっていた。この光景を中山ははつきりと眼底にとどめ置いたのである。そしてその光景は七十歳を過ぎた今でもありありと思い出すという。中山は同級生の中でも頭脳明晰で、従つて成績も大変優秀であつた。大学卒業後は銀行に就職した。記憶力の良さは彼のこの資質によることも

あつたと思う。しかし、これを聞いた人の中には、「いくら優秀な子といつても一歳半の時の出来事を記憶しているはずがない」と言うかもしれない。中山も「もしかしたら父や母からの話がいつしか自分の記憶となつたのかもしれない」とも言う。しかし、そう言いながら「だけど、あの真っ赤に燃えていた西の空の光景は確かに私の記憶である」と確信を持つて言うのであつた。「余程怖かつたんだろうなあ。この恐怖心が私の脳裏にあの光景を刻み込ませたとに違いない」。遠いところを見るような眼差しをして彼は幾度も頷いていた。

彼のこの幼児体験の記憶については東彦にも理解できるところがある。彼にもこの空襲に起因する恐怖が刻み込まれてきたことが後年分かつたからである。空襲は仙台駅を起点とした東北本線東側は空襲を免れた。中山一家が住んでいた東九番丁は被災地との境で、彼の家はかろうじて被災を免れた地域にあつたのである。彼の家と線路を挟んでの東側は新寺小路といつて市内最大の寺町が広がっていた。また、戦前の写真などをみると樹木に覆われていた土地であつたと言ふことが分かる。中山一家は、父親の先導でこの寺町の方向に向かつて避難していったという。彼らはこうして空襲から逃れることができたのであつた。

東彦の同級生の神坂登は、母親に負ぶさり火中を逃げたという。神坂は当時、宮城県庁の裏手に当たる上杉山辺り

に住んでいたという。母親の絹恵と祖母のミネの三人で、父親は招集されて戦地にあつた。彼自身、東彦同様一歳半ほどであつた。当夜、午後九時半頃空襲警報のサイレンがけたたましく鳴つた。サイレンは自宅から一キロほどの市役所屋上からであつた。彼の母と祖母は共に急ぎ身繕いを済ませた。身繕いと言つても防空頭巾と防空袋を持つただけであつた。しばらくすると解除になつた。しかし、二度目の空襲が十時五十六分に鳴つた。立て続けの空襲警報であつた。不安な気持ちが募つていった。その不安が解けないまま二人は防空服装のまま蚊帳の中に入り、布団に横になつた。息子は二人の不安な気持ちをよそにスヤスヤと安らかな寝息を立てていた。嫁と姑にとりこの幼子が唯一の生活の張り合いであり、二人を結びつける絆でもあつた。

「少し休もうか」とミネが言い終わる間もなく空襲の音、焼夷弾の破裂する音が聞こえ、家が地響きで揺れた。「空襲警報が鳴つていないのにどうすてだつちや」と絹恵が叫んだ。ミネは「とにかく防空壕だ」と言つて起き上がった。絹恵も急ぎ起き上がると息子を起こし、服を着せて防空頭巾を目深に被せると背負つた。赤子は突然に起こされたこともあつて、大声で泣き叫んだ。それをだましました外に出ようとしたら空襲警報のサイレンが鳴つた。「随分と遅いごと」そんなことをつぶやき庭に出た。西の空が真っ赤になつていった。空を見上げると、探照灯に照らし出された

B 29の機体がくつきりと浮かびあがり、爆弾がバラバラと墜ちていく様が見えた。そして、雨が降っているのでもないのにザーザーという音が聞こえた。言いしれぬ恐怖感に身体が震えた。北の方角に爆弾が投下され火炎の立ち上がるのが見えた。その火炎に浮かんできたのが二階建ての建物であった。「上杉山通学校でねえが」ミネが叫んだ。そして、爆音のする空を見上げた。巨大な飛行機が数機こちらに向かっていているのはつきりと分かった。長年生きた知恵が発せさせた言葉だったのだろうか。「ここはあぶねえ。防空壕さ入っても無駄だ。逃げっぺ」。「どこささっしや」。絹恵は義母の言葉に困惑を覚えながら応えた。「とにかくこっつはこれから爆弾が落ちてくる。一番丁辺りは燃え上がっている。まだ火の手が上がっていいえ仙台駅方面に逃げっぺ」。結果的にこのミネの咄嗟の判断が三人の命を救うことになった。

二人（正確には三人だが）は、防空頭巾のひもをしつかりと結び直すと県庁の西側を通り、育英中学校、そして仙台高等女学校の脇を通り花京院通に出た。この通りには市電が走っている。暗闇でも線路をたどれば迷うことはない。しかし、この通りに出ると多くの人達が北へ、そして南と急いでいた。西の方は天をも焦がすほどの火炎で、しかもその煙と悪臭がひどかった。自宅の方を振り返ればやはり紅蓮の炎が北の空を染めていた。この炎は背後から襲つて

く秋保電鉄の長町駅までいそごう。陽が上がるまでに坪沼に着かなければ」。二人は再び歩き始めた。行く手には焼夷弾の音も火の手もなかった。星が異様な明るさで白く輝いていた。ただ、夜中にも拘らず人々の右往左往する姿が見えた。それが逆に二人には安心感を与えた。

長町は仙台都心から南部に位置し、広瀬川によって区分されている。昭和三年に仙台市と合併している。秋保電気鉄道は長町と秋保温泉を結ぶ馬車軌道として一九一四年（大正三年）に開業した。温泉客の旅客輸送と秋保石の貨物輸送を目的としていた。その後電化されたが、一九六一年廃線となった。長町駅は東彦が二年生まで通っていた長町小学校への通学路の途中にある。また、幼い頃から祖母に連れられてよく秋保温泉に湯治に行った。その折は必ずこの秋保電鉄を利用した。大変なじみのある電鉄であった。絹恵とミネがこの電鉄の長町駅に着いたのは午前二時五分であった。それはB 29の爆撃が終わった頃でもあった。駅舎の真ん中の軒下に大きな丸時計が掲げられていた。静かに時を刻んでいるのが絹恵には不思議に感じた。それにしてもあの業火の中をよくも命を永らえてきたものだと二人は顔を見合わせた。そして思い出したように「オムツをかえなければ」と絹恵は言う。駅のベンチに登を下ろした。登の顔は少し煤けていた。その時、「登、どうすたんだ。おかつさん、登がたいへんだ。べすた」

来そうな勢いであった。とにかく「逃げねば、何としても登だけでも助けねば」。ミネは六十歳とは思えないほどの力強さで絹恵に声を掛けた。絹恵は、この母の言葉に勇気づけられ、負ぶっている登の帯をぎゅっと結び直した。ところが仙台駅の手前五百メートルほどの所に来たとき、仙台駅に焼夷弾が落とされ燃え上がり始めた。その斜め向かいの名掛町一帯も燃えている。前後から火に挟まれた格好であった。二人は、この炎の帯を通り越す以外、生きる道はないと決断をした。そして、同時にこの時、二人はミネの娘の嫁ぎ先の坪沼まで逃げていくことを決意したのであった。仙台駅前を、そして北目町、清水小路を通り過ぎたとき、初めて二人は助かったと実感した。その先の荒町方面は空襲がなかったのである。秋保電気鉄道（通称秋保電鉄）の長町駅までおよそ三キロの地点であった。二人は広瀬川に掛かる広瀬橋に立ったときようやく周りを見渡せる余裕ができた。川の流れの音、そして石に砕かれてきた白い波が夜目にはつきり見えた。橋の下から吹き上げてくる川風に今まで経験したことのないような動物の肉油の焼ける臭いがあった。そして、今逃げてきた道を振り返ると、天を焦がすような巨大な炎が立ち上がっていた。「仙台が燃えている」と、絹恵は叫んだ。「まるでこの世の終わりのようだ」。ミネが応えるように呟いた。泣き叫んでいた背中の登が少しづつ落ち着いて来ているようだった。「とにかく

「なじよすた」。ミネの問い掛けに、絹恵は声をくぐもらせながら「やけどすたみたい」。

登の防空頭巾は逃避行の途中外れてしまったのだ。そこに火の粉が当たり、頭髪を焦がしてしまったのだ。「なんで早く気が付かなかったのか。私の落ち度です。申し訳ありません、おかつさん」

「絹恵、あんだの落ち度ではねえ。むしろ、よくぞ命を守ってここまで来てくれた。私は感謝こそすれ、恨むことは少しもないっちゃ。でも、頭のやけどで済んだのはご先祖様のお陰かも」

「そういうとミネは、持ち出して来た位牌を取り出しベンチの上に置いた。そして、お経を上げながら合掌した。

「おかつさん本当にありがとうございます」

絹恵はそう言いながらミネに倣って手を合わせた。登のやけどはそれほどひどいものには見えなかった。しかし、三方所ほど皮膚が見えるほどになっていた。その皮膚も火傷を起こしていた。

「もぞこい（可哀想な）ことすてすまっただ」

ミネはぼろぼろと涙を流した。

後年、神坂は成長するにつれ、このやけどが原因での禿に悩まされたという。時は嫌がらせやいじめなどもあったという。高校時代、東彦は神坂が禿であると言うことは少しも気付かなかった。バスケットボール部のキャプテンと

して活躍していた明るい、実直な神坂であった。恐らく他の同級生も同じだったはずである。

「ほら、ここだつちや」と、「ひろ」の席で髪を毛をかき分けて見せてくれたが、それはやけどとは思えないほどの薄さであった。この年齢なら誰しもあると言つてよいほどのものであった。しかし、東彦はなぜかそのことは言えず、「ほんた」と同意しただけであった。

三人が線路伝いにミネの娘の嫁ぎ先に着いたのは夏の朝日がまぶしい午前七時過ぎのことであった。それから五ヶ月間、引き上げてきた父親も含めてこの地で疎開生活を送つたのであった。

二、一歳八ヶ月の空襲体験

実はこの日、東彦たちも秋保の手前の茂庭に向かつて逃げていたのであった。茂庭には東彦の母の兄嫁、里久の実家がある。そこに疎開しようとしたのである。東彦一家は実家であり、里久たちが住む母屋の裏にある隠居家に母子で住んでいた。この頃、東彦の父親である長次、また里久の夫である源太郎らは徴兵でそれぞれ岐阜県の犬山、北支那にいた。男手と言えば里久の長男のみであった。しかし、長男の秀樹はわずか十歳に過ぎなかった。里久にはその他に、十五歳になる十和子、八歳の知子、そして東彦と同年

齡の洋平の四人の子どもがいた。また、姑のハルが健在であった。

東彦の母親・由美の実家は農家である。自作農家であったが、祖父が縁戚にあたる者の連帯保証人になって耕作地の三分の一程を取られてしまった。それだけに家族一同が朝から夕方までコマネズミのように働く日々であった。結婚前迄に由美も東京に働きに出、実家に送金していたほどである。

六月下旬からくもりや雨の日が続いた。七月に入っても梅雨模様様の天候が続いた。しかも、連日の空襲警報が鳴り響いていた。ただ雑草だけが勢いよく茂っていた。九日の朝はくもりであった。そして、九日夜半から十日までは数少ない快晴であった。この雨上がりは農家にとつて天からの贈り物であった。一家は総員で畑の草取りに励んだ。由美も息子を母親のハナに預け畑に入った。トウモロコシは一畝を超える背丈になり、サツマイモの葉は地面を覆い始めていた。雨でぬかるんだ畑は湿度が高く、少し動いただけで汗が噴き出てきた。それを手ぬぐいで拭き拭き励んだ。

由美は農家の娘にしては農作業が好きではなかった。どちらかというところ裁縫や料理の方が好きであった。農作業が嫌いなのは母親のハルに似たのかもしれない。この時期、農家は政府の食料生産向上の叱咤激励を受け忙しかった。茅葺きの母屋を中心にして三反歩の畑が広がっていた。そ

の畑を「いぐね(仙台弁で屋敷林のこと)」が取り囲んでいた。少しの風が吹いてもこのいぐねの木々がさわさわと音を立てるのであったが、この日はそよとも鳴らなかった。風が年間を通してよく吹き、特に、冬季は蔵王おろしが吹きさすぶこの地では珍しいことであった。由美は乳の張り始めて来た胸を抑えながら腰を伸ばした。空を見上げると雲の中からほんの少し青空が見えた。久し振りの青空に由美の心は軽くなった。見上げた額から大粒の汗がツツと落ち、こめかみ、そして頬を伝い落ちていった。その汗を拭きもせず、由美は小さな青空に目をやった。その明るさに由美は二、三度目をしばたいた。その間に晴れ間はなくなつてしまった。あつという間のできごとで、由美は懐にしまい込んだ大事な宝物を一瞬に抜き取られた思いであった。由美はそのことが何か悪い兆しのように思えた。

「家財道具は大丈夫だべつか」。疎開した家財道具のことが頭をよぎった。

由美の実家の前方三百ほどには東北金属という軍需工場があった。その会社の敷地には実家の土地もかなりあったのだが、スズメの涙ほどの金で政府に買い上げられてしまったのだ。「アメリカ軍は必ずこの東北金属を爆撃する。そんな時はおら方の郡山台畑、矢口、そのほか矢来、もしかしたら籠の瀬辺りも爆撃食らうはずだ」という風評が立っていた。さらに、「近々にB29が襲来する」という話が信

憑性をもって人々に語られていた。「とにかく大事な荷物だけでも疎開しよう」と、由美の嫁ぎ先でも真剣に語られていた。特に由美より五歳下の小姑の淳子は強行で、それに押し切られるように由美も承諾してしまったのである。荷物は三日前に、当時、高価であったゴムタイヤ付きのリヤカーで、義父の清吉が運んでいった。疎開先は義母の実家であった。由美の嫁ぎ先から西方およそ八キロほどのところにある高館であった。家族は高館とは呼ばず、この地にある熊野堂の名を借り「クマンド」と呼んでいた。クマンドは当時の仙台市の南端を流れる名取川沿いにある。山懐に抱かれた静かな山里であった。疎開の荷物には由美の和服、写真など思い出の数々があった。その中には東彦の写真アルバムもあった。また、大事なリヤカーも舅が置いてきたのであった。

「まさかクマンドまでは空襲はないだろう」

由美は自分に言い聞かせるように声に出した。

その夜、ハルの音頭取りで白米が炊かれた。ハルは当時としては珍しく既成概念や慣習などに囚われない進取の気性のある人であった他方、酒好きで、男衆に混じつて時にタンカを切るような伝法肌の面もあった。東彦の脳裏に今でも残る場面がある。それは何かの祝い事で「お振る舞い(自宅でお客をもてなす宴会)」が終わってからのことであつた。近親の男衆たち数人が残り、ちびちびと酒を飲ん

でいた。その時、突然ハルが膝の前の畳に出刃包丁を突き刺した。そして「おれは安久の娘だ。馬鹿にすんでねえ」と大声を上げ、凄んだのである。何が原因か、そしてその出刃包丁はいつ用意したのかは当時、八歳ほどであった東彦には分からなかった。しかし、その剣幕には周りの者一様に驚き、早々に退散したのは無理からぬことであった。東彦は恐怖で身体がブルブルに震えてしまったのである。

「安久」とはハルの父親で安西久野助のことである。隣村の豪農であり、また実力者であった。また、ハルの叔父は西南戦争時、仙台藩士として薩摩軍に属し、戦死している。ハルが傾きかけた村田家に嫁いできたのはハルが片目を失明していたからであった。それでもなければ美貌でもあったハルが村田家ほどの家格の家に嫁いでくることはなかった。十歳の時、稲の脱穀中穀殻が目突き刺さってしまった。実母を亡くし義母の庇護の下で暮らしていたハルはそのことを言い出せず、痛みを我慢していた。ハルの異変に父親が気が付いたときには既に手遅れになっていたのである。

また、今流に言えばサイドビジネス、片手間仕事をしたこともある。当時、村には一件の酒屋も、飲み屋もなかったというので、酒屋商売を始めた。特別に店を構えた訳でない。酒樽や酒瓶を置いて量り売りをしたわけである。当初はそれなりに利益もあつたらしい。ところがハルの夫も

また酒好きであった。それを堪えていたわけだが長続きするはずもない。少しばかりの利益に気を良くし、一杯だけが二杯になり、二杯の次は限りがなくなってしまう。始めの方は夫婦互いに遠慮しながら隠れて飲んでいたが、あるところまできたら二人で飲み始めたという。あつという間に赤字となったのは当然であった。短期間で店を畳む羽目になったという。

他方で、食べ物にはお金を惜しまなかった。そしてまた、恵まれない隣近所の人にも何かと情けをかける人でもあった。ハルは借家も幾つか持っていた。借家人にはその日の生活に困る人もいた。「味噌貸して、醤油貸して、米貸して」などというのは日常茶飯事のことであった。そのうち家賃も払えない人も出て来る。ハルはそんな人には無理に家賃を請求などしなかった。そればかりでない。極度の貧困に子育てもできない家の子を預かり、成人まで面倒を見てもいたのであった。

農家であるから自家用分の米は必ず確保していた。その辺は永年権力者から虐げられて生きてきた者の知恵が脈々と息づいていたのである。「贅沢は敵です」などについても必ずしも素直に従ってはいなかった。戦後、闇のドロブクなどは大概の農家では隠し造っていた。東彦も小学生の頃からその味は知っていた。建前と本音は何も為政者に限ったことではなかったのである。

この夜の夕飯のおかずは敷地内に栽培していたタマネギをざくざくと切って菜種油（これも自家製）で炒めたもの、大根とネギの具の入った味噌汁、大根の漬物、納豆（自家製）であった。今から考えると貧しい食卓に見えるかもしれないが、当時の一般庶民から見たら垂涎のものであったろう。食後、順番に外風呂に浸かる。当時の農家の大半は母屋から離れた所に風呂場と便所があった。この二つは並んで建てられているのが通例であった。水は井戸水であった。井戸は便所から離れた所に設けられていた。これも永年の生活から生み出された知恵なのだろう。風呂場の側を小川が流れていた。清流と言ってよかった。そこで野菜の洗いや洗濯ものすすぎ、また風呂水に使用していた。時折温まった風呂桶の表面にメダカが浮いていることがあった。冬季には軒下まで雪が降り積もることもあった。沸きすぎた湯は、この積もった雪で冷ますこともあった。幼いころの東彦の思いであるが、今でも忘れることができない。もう一度自然豊かなあの時代に還りたいとしみじみ思う。また、風呂を使った後は必ず馬小屋を通って自宅に戻る。その馬小屋の前を通るとき、母の背の東彦は必ず「お馬さんねんねしてね。明日、赤まんまあげっからね」と言ったという。すると馬は近寄って来てブルブルと声を出し、首を振ったという。家畜と人の間に互いの温もりが通い合っていた時代でもあったのである。

由美は八時半には床に就いた。いつもの習慣でラジオをつけている。音は低めにしてあった。このラジオは母のハルからの結婚祝いの贈り物であった。この日、ラジオからは「前線へ送る夕べ 日本名曲集」というタイトルで藤原義江などの当時の有名歌手の歌声が流れて居た。しかし、ラジオからは時折空襲警報が流れてきた。「どうせ毎度のこと、大したことなからう」と由美は思った。疲れた身体がそうさせていることは分かっていた。そのうち警報は解除された。その音楽を聴きながら由美は東彦に乳をやっていた。お腹が一杯になった東彦は直ぐに眠りに陥った。由美も久し振りの畑仕事でほどよい疲労と音楽のせいにか、たちまち熟睡してしまった。部屋の隅に置いた蚊取り線香の紫煙が緩やかに円を描きながら上昇し、そしてその先端が何かに吸い込まれるように崩れ、部屋の空気に溶け込んでいった。

遠くから地鳴りのように響いてくるサイレンの音にはつととなって由美は跳ね起きた。反射的に枕元の置き時計を見た。夜光塗料の文字盤がくつきりと浮かんでいた。針は九時三十分をさしていた。急いで息子の東彦を抱き起こし、防空頭巾を被せる。そして、おんぶした。突然、眠りを覚まされた東彦は火の付いたように大きな声で泣き叫ぶ。由美はだましながら真つ暗闇の部屋を手探りで表戸まで行っ

た。そして、障子を明け、ついでカラカラと雨戸を開けた。夫の長次が出征前に雨戸の滑りを調節していつてくれたのであった。激んだ部屋の中に外の冷えた空気がさつと流れ込んできた。由美は大きく意気を吸った。新鮮な空気がくまなく体内に巡って行くような気がした。意識もすつきりとしてきた。

「姉ちゃん」

由美は母屋に向かって叫んだ。兄嫁の里久が直ぐに顔を出した。

「警戒警報だけどうすつべつしや」

「警戒だから大したことねえみたい。避難の準備だけして様子みねえすか」

由美の声に、里久は太い声で返してきた。

当時、防空警報には二種類があった。一つが「警戒警報」とその解除の「警戒警報解除」である。サイレンの長さが三分間（三分間連続吹鳴）である。二つ目が「空襲警報」とその解除の「空襲警報解除」サイレンの時間は「警報」が四秒八秒で、八秒宛間を置き四秒宛十回鳴らす（三一八頁）、とある。当然ながら「空襲」の方がより切迫感を持たせている。

由美はまだ泣き止まぬ春彦を背中から降ろし、防空頭巾を取ると、布団の上に寝かせた。そして、乳首を含ませると東彦は豹変したかのように静かになった。由美は再びう

とうとし始めた。そのうちドカン、ドカンという音に再び跳ね起きた。そして、いきなり空襲警報のサイレンがなった。ラジオからもしきりに空襲警報の音が流れてきていた。ただ事ではないと悟った由美は、再び東彦を負い、外へ出た。北西の方の空を見ると真つ赤に染まっている、サーサーという暈を掃いたような音が不気味に聞こえる。これは電波妨害のために投下されたアルミ箔のテープ状のものであったという。

里久一家も全員家から飛び出して来た。十五歳の十和子を頭に子どもが四人、一番下の洋平は東彦と同年で一歳五ヶ月であった。それに祖母のハルである。

「今度は本当の空襲だ。早く防空壕に入らないと」と、ハルも里久も叫んでいる。

防空壕は母屋の裏の藪の中に造ってあった。男手を借りて六畳ほどの広さであった。防空壕としては広い。そこに二家族八人が寄り添って空襲の過ぎるのを待つのである。

しかし、十歳になる勝樹はじつとしていられない。遠くから聞こえるドカン、ドカンという爆弾の音、B 29の爆音に恐怖より好奇心の方が勝っていた。ろうそくだけの乏しい灯りの狭い防空壕の中でうろうろと歩き回り、かといえ二歳下の妹にちよっかいを出す。その度に妹の知子は大声を上げて厭がっている。母親の里久や祖母のハルからその度に叱正を受けているが平気であった。「やっぱり男親が

いないと男の子はわがままになる」。ハルは嘆く。そのうちに防空壕から顔を出し始めた。「敵の兵隊に見つかつたらどうする。爆弾を落とされてみんな死ぬ」とハルが脅しを掛けるが、勝樹は上の空である。そのうち壕を飛び出してしまった。そして、「ぼっちゃん大変だ。北の空が真つ赤に燃えている」と、大声で叫んだ。壕の中の大人たちは内心で誰もが仙台の爆撃の様子が知りたくてうずうずしていた。勝樹の叫びが契機となった。まずハルが「そんなこといいから防空壕に入れ」と大声を出しながら壕の外に出た。出るや否や、直ぐに北の空に目をやった。まさに勝樹の言う通りであった。北の空は真つ赤に染まり、時折大きく炎が膨れ上がっている。一、五キロ先程の北西にある大年寺山、山と言うより丘陵に近い伊達家藩主の霊廟が祭られているところであるが、その上空を三機編隊のB 29が連なって「ドロン、ドロン」という爆音を落としながら仙台上空に向かっている。探照灯で浮かび上がった巨体が銀色に輝いており、それが憎らしいほど悠然と飛んでいる。まるで支配者ごときであった。

「B 29の大編隊が通過しているよ。里久たちもちよつと出て見てみる」

義母の声に釣られて洋平を抱いた里久が背中をかがめながら防空壕から出てきた。そしてハルと肩を並べながら北の空に目をやった。

「ああ、何だべ。これじゃ仙台は火の海だべつちや。とても人間は生きておられねべつちや。由美さんも出てきて見てみさい。地獄のカマドだから」

「米ケ袋の帝大のおんちゃんは大丈夫だべつちや」

壕から出てきた由美が北の空を見上げながら呟いた。米ケ袋とは東北大学と広瀬川に挟まれた一画で、帝大とは現在の東北大学の当時の呼称である。ハルの伯父に当たり、年に一二度人力車に乗ってハルの所に訪れていた。

「伯父さんの所も危ねえいかもな。なんとか無事でいてほしいだけだ。もすかすつと郡山（ハル達の住む地名）に逃げて来つかも」

肩を落としたような声でハルが呟いた。そして、「藪の木が邪魔でよく見えねえな」と、大声を出した。

そのうちに高射砲の音が聞こえてきた。諏訪にある高射砲陣地からだった。諏訪とはハル達が住む郡山から西南に一キロほどにある。江戸時代には宿場町として栄えた。戦争当時は昔の面影をわずかに残し、商店街がちらほらとある町であった。この諏訪に隣接した形で、軍需工場の東北金属があった。この軍需工場を守るための高射砲陣地であった。

この夜、B 29を迎え撃つたのは敵機に届かない高射砲、そして迎撃機なし、というまるで戦いにならない日本側の現況であった。

当夜のアメリカ軍の爆撃機数は一二四機、爆撃時間は二時間二分、投下爆弾は約九一七ト、内焼夷弾が九一二トであった。焼爆来襲回数は二五回に渡る。アメリカ軍機の損傷は六機で撃墜された飛行機はゼロであった。爆撃成果として一・二六平方マイル（全市の二七・八％）を破壊または損害を与えた。（三〇四頁）。この夜の地上の有様は地獄もかくやと思われる阿鼻叫喚の世界であった。しかも地獄の炎熱で焼け焦げた人々の末路はどうだったのか。『仙台空襲』の中に「人間を原材料として人骨という製品を大量に作りだすために、火葬場のカマはうなりをあげて燃えているようであった。戦争のか酷さが胸に迫った。」（森新平）と描いている。そして「サーチライトで照らすと、この悪魔（B 29のこと―作者）たちは光の中にすっかり捕えられうのだが、うち出す高射砲はさっぱり当たらないで、とんでもないところに破裂の煙を残していた。光の海の上を敵機は落ちついてゆっくり投弾をくりかえしていった。機体は銀色に輝きながら市の上空を大きく回り、何回も爆弾をくりかえしていた（一四二頁）

しかし、この空襲について軍はどのように国民に知らせたのか。新聞は「東北軍管区発表十日発表」として次のように報道している。

「敵B 29約百機は、十日午前零時五分頃より（実際は零時

ることになる。だが、B 29は西に寄ったコースを飛んでいた。これは明らかに高射砲の弾丸を避けたとしか考えようがない、と由美は思った。しかし、この時には思いもしなかったが、このコース変更でB 29は思いも掛けない場所に焼夷弾を落としていたのである。

「無駄玉だっぺ」

吐くようにハルが言い放った。ハルは若いときから我が強く人の意見などを素直に受け入れることが少なかった。

「ぜいたくは敵」とか「欲しがりません勝つまでは」などという政府、軍のスローガンなどを腹の中で笑っていた。しかし、そんなことはおくびにもださなかった。世慣れたハルのしたたかな知恵でもあった。

「無駄な鉄砲数撃ちや当たる、って言うけど、これもねえな。単なる無駄玉の見本だ」

ハルには余程腹に据えかねるものがあったのかもしれない。最も耕地に適した、しかも所有耕作地の三分の一程にあたる畑をお国のためと軍需工場の用地として安く買い上げられ、今また、寡婦の身には最も力になる長男、次男を外地に招集されてかろうじて女手だけで耕作している、悔しさや苦痛が溜っていたのであろう。

「何だかだんだん爆弾がこつちさ近づいて来ているみたいだね。かあちゃん」

勝樹が母親の袖を引っ張りながらいう。母親の里久は自

三分、空襲警報発令の時刻に合わせたと思われる。一作者）約二時間三十分に亘り仙台中心部に対し無差別焼夷攻撃を加え来り、（中略）本空襲における戦果は目下調査中なり」（七月十一日・河北新報）とあり、翌十二日の同紙に東北軍管区司令部発表として「撃墜五 撃破一二」とある。真実とは全く逆の報道が臆面も無くなされているのである。

由美達の夜空の上もB 29が傍若無人に蹂躪を行っていた。そして、届かない高射砲の音が夜空に響いていた。

「諏訪の高射砲陣地からだ」

里久が叫んだ。

「B 29やつつけろ」

元気の勝樹が叫ぶ。大人達三人も拳を握り、唇を噛み締め「切歯扼腕と言う言葉がこれほどびいたりとはてはまる場面は他にない」と由美は思った。そして「チキシヨウ、チキシヨウ」という言葉が口から自然に飛び出てきた。

この諏訪からの高射砲がB 29の進路を「変更させた」と由美は後に思った。今回のB 29は、閉上（現在の名取市にある漁港、東日本大震災では壊滅的打撃を受ける）上空から真つ直ぐに大年寺上空を通過して仙台市内に入り、右旋回しながら爆撃を繰り返し、太平洋上に抜けるというコースであった。このコースであると、由美達の家の上空を通

分の胸の内を見透かされたしまったように思い、「ほんだらごとねえべすた」と、勝樹の手を払いのけながら言った。「でも姉ちゃん、勝樹の言う通りでねえべすか。なんだかおっかなく（怖い）なつて来たね」

由美の言葉が終わるか終わらないうちに、「おれ屋根に上って見てくるべえした」というが早いか、勝樹は母親の止める間もなく走って行ってしまった。そして、平屋の物置の屋根にあつという間に上ってしまった。「ましろのごとし」という表現がびつたりであった。日頃から勝樹は物置の屋根ばかりでなく屋敷内の高いケヤキ、樺の木などに登って遊ぶことが常であった。物置の屋根に上ったと思うや、それに続く母屋の茅葺きの屋根にスルスルと上って行った。母屋の高さは物置のその二倍ほどある。茅葺きの屋根は重さには弱い。大人が無理に登ろうとすれば足が茅を踏みつけるか、下手をすると踏み抜いてしまう恐れがある。その点、体重の軽い子どもなどは茅を傷をつけることもない。勝樹はあつという間に棟にたどり着いてしまった。そして棟を跨いで身体を安定させると炎が上がっている北の方角に身体をよじった。下からハルが「どうだあ」と声を掛けてくる。

「大変だあ、ものすごい勢いで燃えているよ。爆弾もどんだん落ちている。仙台は終わりだあ」

勝樹は語尾を大きく伸ばして言っている。

「ほんで、火はこつちさ来ているがあ」
母親の里久も大声で叫ぶ。

「かあちゃん、長町に近づいているみでいだあ。B 29 だつてどんどん仙台に向かっているよ」

夜の火事は近く見えるという。次から次へと落とされた焼夷弾はまさに火に油を注ぐ状態にびったりであった。焼夷弾はアメリカ軍が「木造の日本家屋を効率よく焼き払うため、第二次世界大戦時に開発した」(ウイキペディア)という。「38 発の M 29 焼夷弾を子弾として内蔵するクラスター爆弾などとして投下された。投下後上空七百呎程度でこれらが分離し、一斉に降り注ぐ」(同上)というからたまつたものではない。降り注いで来たのは油脂である。それが大きなバケツで撒き散らかしたように一面に広がり、着火して燃え上がるのである。四方が火の海になり、火炎吹きまく中を逃げるか、その火炎に包まれて焼死するほかないのである。また、「その弾が落下してくる時、尾翼が回転し、それが鳴る。さく裂の時の殻の破片が鋭い刀となつて人を傷つけた」(一〇六頁)。人々は銀色に輝く巨大な城塞のような B 29 の下で鋭い刀、燃え上がる油脂、そして直撃弾にさらされながらあてもなく逃げ惑っていた。「かあちゃん、なんだかおつかねえ(怖い)くらいの火の柱があつちこつちに見えるよ。もう、おらほう(私達の方)の方も危ねえがも」

ければなかつたということが彼女の性格をつくつたのかもしれない。あるいは素封家に育つたという矜持がそうさせたのかもしれない。言い出したら聞かない質であることは娘の由美も嫁の里久も十分に承知していた。心の中では二人とも疎開した方がいいとは思っていた。渡りに船と行きたいところであつたが乳飲み子を抱え、しかも里久には四人の子どもがいる。しかも疎開先をどうするかという問題もあつた。

「疎開先は里久の実家にすればいい。家にはおれど十和子と勝樹で守つから」

里久と由美の懸念材料を見通し、それを払拭するハルの言葉であつた。十和子は十五歳で女学校に通うしつかり者の娘であつた。十和子が残ると言うことであれば里久も由美も安心であつた。勝樹は落ち着きのない子どもで里久には心配の種であつた。しかし、直ぐにハルの心中が推し測れた。勝樹は安西家の跡取り息子である。ハルはこの跡取り息子は手元に置きたかつたのであろう。

「ばあちゃん、もし、ここさ焼夷弾落ちたらどうすんの。大事な跡取り息子を駄目にすてもいいの」

由美が怖い顔をしながら母親に言った。

由美の意見に不意を突かれたのか、ハルは瞬時黙り込んだ。そして、

「いや、おれが間違つていた。やつぱり勝樹は大事な跡取

そう叫ぶ勝樹の声は先程の元気さはなく、震えていた。そして、その顔は赤く照れ映えていた。ドカン、ドカンという鈍い音が、地を揺すりながら連続的に響いて来る。それは火炎で赤く染まる北の空以上に彼女たちに恐怖心を与えた。

「勝樹、直ぐ降りてこい」

里久の必死な声は、さすがに勝樹にも届いたようであつた。また、彼の恐怖心も極度に達していたのかもしれない。彼は屋根にすがりつくようにして滑り落ちてきた。

「勝樹、いいか、ゆつくりだど、ゆつくりだど」

ハルが一語一語区切るようにして勝樹に呼びかけた。

勝樹は祖母の声にすっかり応えるようにして芽を握りながら降りてきた。物置の屋根に降り、そこから梯子にすがり無事に地面に着いたときには彼の母親も祖母も、そして叔母である由美も胸を撫で下ろしたのであつた。

「郡山は危ねえ、何たつて東北金属があるからな。なんぼ諏訪の高射砲が撃つたつて届かねえばすかたねつぺ(仕方が無いでしょう)。いつ B 29 から焼夷弾落ちてくるかわかんねえべ。落ちてすまつてからじゃ遅い。疎開した方がいい」

ハルは里久と由美に向かって決然とした口調で言った。決断の早さはハルの特性と言つてよい。この時代の女性には珍しい。夫に先立たれて何事も自分自身で判断を下さな

り息子だ。おれより母親の里久の側に置いた方がいいというのはやつぱり理屈だつぺ」

そう決まつた。

しかし、この時代、大概の家には電話などはなかつた。まして百姓家にあるはずもない。里久の実家に着いて「疎開してきました」と告げるしか方法はなかつた。B 29 の爆音が響く下で慌ただしく疎開の準備が始まつたのである。

この夜は新月で月は見えず闇が深かつた。それだけに頭上の満点の星は一段と光を増して見えた。星々を集めた天の川が帯となつてきらめいている。そしてその一つ一つの星が地上に語り掛けるように瞬いている。灯火管制の敷かれた四方は漆黒で、足許はおぼつかなかつた。前方の山々が黒々と屹立し、行く手を遮るように迫っている。しかし、闇夜の生活に慣れている由美達にはそれほどの困難はなかつた。むしろ、この闇に包まれた方が身の安全が保たれるように思えた。家を午前二時頃出発した一行は国鉄長町駅前を通り、秋保電鉄長町駅の先を左折してしばらく進んだ。菩提寺である龍澤寺に至る道はなだらかな坂となつている。しかし、龍澤寺の手前五百呎辺りで坂は突然険しくなる。「メー」とヤギが鳴き声を上げた。リヤカーの後ろに繋がれたヤギである。リヤカーには布団が敷かれ、里久の末っ子の洋平と由美の長男東彦が仲良く並んで寝てい

る。そして、ハルの心尽くしのの米と味噌がたっぷりと積まれてあった。

前方の黒々とした山々の連なりに反し、行く手左側に当たる北の空は夕焼けのように赤い。爆音と共に時折焼炎がパツと立ち上る。由美達一行は、里久の実家のある茂庭に向かつて笹谷街道を急いでいた。由美の実家には母親のハルと里久の長女が残った。そして幼子を抱えた二人のことをおもんばかったハルが、大事なリヤカーを与えてくれたのであった。また、乳の出が良くない里久は、その不足分をヤギの乳で補っていた。そのヤギもリヤカーに繋がれた里久の長男の勝樹と次女で十歳になる知子は歩いた。長町から茂庭までおよそ八・四キロである。この頃の子どもにとつて歩くことはそれほど難儀なことではなかった。ましてや勝樹と知子は百姓の子である。日常的に家事や時に農事を手伝うことは当たり前であった。また、五、六キロを歩くことなどは日常茶飯事であった。リヤカーは里久が引いた。これまた里久の日常生活の一部であった。この時代、リヤカーは野菜などの農作物を運搬するという本来の役割の他に病人を病院などに運ぶ乗り物として、さらに子どもの遊び道具になることもあった。リヤカーとは「自転車の後ろに連結して荷物運搬に用いる車。自転車からはずして人力で引くこともある」（日本国語辞典）。しかし、当時自転車は高級品で、ほとんどの農家（小作農が多かった）

は自転車までは手が届かず、従って、人力で引くことの方が多かった。リヤカーを引くのには結構な体力を要する。

しかし、押す方も楽ではない。どうしても腰を折る形になるものだから身体に無理がかかる。由美の額からは汗がしったり落ちた。この夜の気温は「一五度ほどで肌寒い状況であった。湿度は八十%ほどで風は少しあった（三〇五頁）」。山裾を縫うように延びる道であった。それだけに気温は少し低めになるが、湿度が高い分どうしても汗が出てしまうのである。時刻は二時半頃だろう。「だろう」というのは二人とも時計を持っていないからである。しかし、彼女たちの体内時計にそれほどの狂いはない。

「姉ちゃん、そろそろ一休みすつべすか」と、由美は額の汗を腕でこすり上げながら声を上げた。

「由美ちゃん、もう少し行くすべ。鉤取までは行きたいね。勝樹も知子もそこまでは大丈夫だと思うから」

「ということは、後三十分か」。由美はそう思いながら「それがいいんですがね」と応えた。義姉の実家に幼子を抱えて世話になる身である。義姉の機嫌を損ねたくないためである。

「昔で言えば草木も眠る丑三つの時刻だけけど意外と人が通っているね」

「姉ちゃん、みんな秋保方面でねえすか。やっぱり仙台から逃げて疎開する人達みたいだね」

由美は先程から何人に挨拶したろうかと数える。中には防空頭巾が焦げた人、顔が煤けた人、それに手や顔にやけどを負った人もいた。「仙台はよっぽどひどい空襲だったんだな」。由美は独りごちた。

「あら、あんだだずリヤカーでどこまで行くのっしや」

五十前後とみられる婦人が由美に声を掛けて来た。その婦人の後ろには娘か嫁かと思われる女性が赤子をおんぶしてついて来ている。

「茂庭までいぐんです。長町の郡山からですけど」

郡山在の人の多くは「郡山」と答えても「どこの郡山すか」と重ねて問われることが多かった。それで「長町」を枕詞にする習性がついていた。由美も同じような体験をしてきたものだから「長町」をつけてしまっていた。

「長町からですか。長町は空襲なかったっすべ。なんで逃げて来たのすか」

「家の前が東北金属で、みんなが逃げた方がよがすべ、というもんですから。それに諏訪に設置されている高射砲陣地からの弾の音が凄くておんがなくなつて（怖くなつて）きたものすから」

「あんだだづ（あなたたち）はどこがいらしやつたんですか」

「わだすだづは、愛宕山の近くの越路からです。とにかく何もかも焼けてしまつて命からがら逃げてきたのっしや。」

嫁の」と言つて話を切り、その婦人は後ろの女性に顔を向けた。そして

「嫁の実家が人來田ひときたにあるもんですから、そこに世話になるうと思つて急いでいるわけです。何しろ一歳になる長男を死なせてはご先祖様や戦地の息子に申訳ねえすから」

「人來田なら、茂庭の手前ですから夜が明ける前に着きますよ」

「ありがとうござえます。お宅様がたはヤギも連れてつしやる。まあ、本当に用意周到で。これなら赤子も安心ですね」

姑の後ろの女性は俯いたまま、ひと言も発しなかった。怪我でもしたのかと由美は思ったが、そんな様子は何もなかった。

「ヤギ」という言葉を分かつたのかどうかは定かではなかったが、そのときヤギが、メメモエーと鳴いた。いつの間にか勝樹が木の枝を持つてヤギの尻を叩いていたのだった。

「それでは先を急ぎますので失礼します」

「お氣をつけて」

由美も丁重に応えた。

「おばちゃん、今の人達も茂庭さ逃げて行くの」

知子が由美の顔をのぞくようにして尋ねてきた。

「茂庭でなく人來田だつてさ。茂庭の手前だから後一時間

もしないで着くべき」

「ふーん、でもなんでみんな逃げるんだすか。学校では逃げないで戦え、焼夷弾なんておんかなぐねえって先生方教えてくれたけど」

「知子、お話と本当のことは違うことが間々あるんだよ。焼夷弾だってあんなに雨あられのように降ってくるなんて先生も思わなかったんだべ。天気予報で小雨と言っていたものが大雨になってということだしや」

「そうか、小雨の予報が大雨になったということか」

「うんだ、うんだ」

「おばちゃん」と、今度は勝樹が由美に話しかけてきた。

「日本は戦争に負けないですか」

「そんなこと大っきい声で言うじゃねえ。他の人に聞かれたらどんなことになるかわかんねえぞ」

「でもっしや、B29がブンブン飛んできてバンバンと爆弾落とすているのに日本軍の飛行機は一機も向かってねえすべ。高射砲だつてさっぱり届いてねえすべ。これじゃ手も足も出ねえって言う事じゃないの」

勝樹は口も達者であった。

「勝樹は口から生まれて来たみてえだな。日本軍はアメリカ軍をもっともつと引つ張り込んですすて一気にやつつける作戦じゃねえのがな。まさかこのまま黙っているわけはあんめえ」

「そうか。日本軍は高等戦術って言うやつを使っているのが」

「うんだ、うんだ。だから、私達銃後の者達も気を抜かねえでじつと我慢すてねえと」

「それには神様がっているからね」

「おばちゃん、どんな神様すか」

「神風を吹かせる神様だよ。日本には八百万の神様たちが守っているんだ。その一番てっぺんに天皇陛下様がござらっしゃるんだ」

「でもおばちゃん、なんで今、神様が神風を吹かしてB29をやっつけてくれねえの。今やっつけてくれれば、俺たちだって逃げなくてもいいのに」

「勝樹はまだ小つこいから分かんえと思うけど、簡単に神様が助けてくれたら日本人はやみぞうたかり(怠け者)ばかりになってしまふべ。今は我慢を俺たちに教えているんだと思うよ。だから、勝樹も知子も不平は言わずにがんばるんだよ。そのうち天皇陛下様がおでましになり、陸海軍を叱咤激励され総反撃にでるはずだ。そうしたらアメリカ軍なんてあつという間に海の藻屑さ。何しろ天皇陛下様は大元帥様でもいらつしやる。もし大元帥の天皇陛下様がお出ましになって陸海軍に号令されたらアメリカ軍なんて木っ端みじんさ」

「それに天皇陛下様は現人神様でもいらつしやるんでしょ

う。おばちゃん」

「そうだよ。アメリカにはこんなすごい方はいねえべした。元々鬼畜米英だ。犬畜生に等しい民族だ。私達大和民族とは元が違う。だが、今は我慢の時だぞ、勝樹」

「分かったよ、おばちゃん」

「勝樹は本当に物わりの良いわらすつこだ」

それを聞いて勝樹は鼻をうごめかした。

「知子も分かったべ。おめえも十だからな、しつかりがんばねば」

「おばちゃん、何がんぼるの」

「何つておめえ、戦争に勝つまでさ。子どもから大人まで、男も女もみんな力を合わせてアメリカに圧力を掛けて勝ち戦にするんだよ。情けなんていらねえからな。とんかく圧力だよ。話し合いだなんていう人もいるらしいけどこれは非国民の人がいうことだからな、だまされんじゃねえぞ」

「分かったおばちゃん。おら方の先生も同じようなこと言つてだもんな」

「圧力だあ」

勝樹が大声で叫び、拳を上げた。

「やっつけてやるぞ」と、知子も拳を振り上げた。その上空をB29がまた爆音を響かせながら北の空へ向かっているのがくつきりと見えた。

「鉤取に着いたよ。ここら辺でお茶すつか」

そう言うとき里久はリヤカーを慎重に止め、水平にした。

「わらすつこ達がぐつすり寝てくれて助かったなや。とにかくまず水を飲むしや」

「そうと里久はリヤカーにくくりつけたヤカンを外し、蓋を取り裏返しにするとそれに水を注いだ。そして勝樹に渡した。勝樹はその裏蓋の水を一滴もこぼさずに飲み干し「うめえや、かあちゃん」と叫んだ。その後、順繰りに知子、由美と飲んでいった。

「高館の方見てよ、由美ちゃん。火が上がっている」

左手に提げたヤカンをだらりと下げながら里久が叫んだ。

「ほんとだ」

「そう由美も叫んだ。その叫びと足の震えが同時だった。

「クマンドの方は大丈夫だべすかね」

「ちよつと暗くてはつきりすねえげどクマンド辺りも燃えているかもしれねえな」

熊野堂には由美達の家財道具や貴重品一切を疎開させていたのである。

「なじよすたらいいんだすべ」

由美の身体から一度に力が抜けていった。由美の心配は現実のものとなっていたのである。この夜、爆撃された仙台市の中心地から南方直線距離で五キロほどの丘陵地帯の西多賀神社、芦の口、そして由美一家の家財を疎開させた高館、熊野堂に焼夷弾が落とされたのである。芦の口一帯

には高射砲陣地、西多賀神社近くの三神峯には陸軍幼年学校があったので爆撃の理由が分かる。しかし、高館地区は全くの農山村地帯である。爆撃の理由が分からない。誤爆だったかもしれないが、被災者や死者にとってはなんともやるせないことであつたらう。

「どうしたらよいのか」と問われた里久には応えようがなかった。強いて言えば疎開には由美も不平を漏らし、里久自身も反対であつた。「今更」というのが里久の本音であつた。

「由美ちゃんね、今度の空襲ではたたくさんの家が焼かれ、命を奪われた人も数え切れないかもしれない。家財道具はこれから働いて買戻せるからね。命があつたことに感謝して前を見ていぐしか方法ないんじゃないの」

「そうだね。東彦もいることだし、そのうちウチの人も無事に帰って来ることだろうし」

「そう、そう。とにかくここまで無事に来たんだからがんばって行くべっしや」

「姉ちゃんの言う通りだね。がんばろう」

そいとうと二人はリヤカーの赤ん坊を抱き上げるとオムツを取り替え始めた。眠っているところを起こされた赤ん坊は声を出して泣き出した。しかし、オムツを替え終わり授乳を始めるとじき泣き止んだ。勝樹と知子はもらった味噌田楽のおむすびをうまそうに頬張っていた。満ち足りてい

る子ども達の安らかな顔に由美と久里は癒やされた。そして「なんとかこの空襲をくぐり抜けて行こう」と心に言い聞かせるのだった。

いつの間にか爆音が聞こえなくなっていた。山並みが続く西の空は黒くそびえ、行く手を遮っているかのようだった。その西の空が急に闇を増したように里久には思えた。そして「夜明けが近づいている」ことを感じた。なだらかな坂道が続く。さすがの里久もふくらはぎが張って来たように思えた。

「姉ちゃん、B 29 行つてすまつたみたいだね。全然おどっこ（音）がすなくなってきたべっしや」

「んだあすた。もうこんなごときめんだけど、まだアメリカ軍は攻撃してくんだべなあ。いい加減戦争には飽きたなや。これ以上焼夷弾だ、機銃弾だなんてやられたら米の収穫もままならねえべ。米が取れなくなったらどうやって戦えつていうのかね。お偉いさん達は分かつてのがね。世の中、押すことばかり考えちゃだめだすと。時には引くのも大事ださ。ところで、今時は三時過ぎぐらいだべか。もうすぐ夜が明けるな」

「三時ごろだとすつと、後一時間ちよつとかね、夜明けまで。姉ちゃん」

「んだな。でも子ども達が達者でよかったね」

「ほんとだすべ、姉ちゃん。勝樹も知子も達者だね」

「すごい、すごい」と言いながら知子も勝樹の後を追って行く。

二人の頭上を蛍たちはその群れを乱すことなく、やっぱりふわふわと天に向かいゆつくりと昇って行く。

「闇が深まるほど蛍の火は輝きを増し、大きくなる」

由美の蛍の火の群れを見る目からひとしずくの涙がこぼれた。

そして

「戦争は終わる」

なぜかその言葉が胸を衝いて来た。

「東彦と洋平もあんまり泣きもせず眠ってくれて助かったよ。いぐら赤子でもおんぶずてリヤカー引つ張るのは楽でねえすからね」

「でも姉ちゃんのお陰で助かりました。これから先もよろしくお願いします」

「なあにお互い様だから、遠慮はねえことにすつべっしや」

北から西多賀の丘陵の裾が下がり、南から高館の山裾が降りて来るその境を名取川が流れている。道は隘路のようになっている。山の木々が盛り上がるように黒々と道路に被さっている。道路の左端は崖となつて下の清流へと続く。真つ黒な木々が邪魔をして清流は見えずその音のみが微妙に聞こえる。

「あつ、蛍だ」

勝樹が突然叫んだ。

「ほんとだ。蛍だよ、かあちゃん」

知子も弾んだ声で叫ぶ。

小さな、黄色の点が崖下から沸くようにゆらゆらと飛んでくる。丘陵の裾の膨らんだ木々に張り付いた蛍の火がポツ、ポツと微かに点滅している。崖から昇り上がって来た蛍が急に膨らんで道の上をふわふわと飛んでいく。「わーい、わーい」と叫び、両の手をぐるぐると回しながら勝樹がその群れの下に突進して行った。

資料1 『仙台空襲』編集 仙台「市民の手でつくる戦災の記録」の会 宝文堂出版株式会社

資料2 菅野 正道『せんだい歴史の窓』河北出版センター

資料3 石澤 友隆『よもやま探訪記「仙台人」気質』河北新報センター

資料4 『わすれかけの街・仙台 昭和40年頃、そして今』河北新報センター

資料5 斎藤 武『仙台方言あそび』株式会社金港堂出版部

資料6 パンフレット「戦災と復興」 仙台市戦災復興記念館